

論文

16 世紀ペルーにおけるタキ・オンコイと水銀汚染 — 10 分の 1 税徴収、先住民のサボタージュ、強制的改宗

真鍋周三 SHUZO MANABE

兵庫県立大学 UNIVERSITY OF HYOGO

要旨

1560 年代ペルーアンデス高地のワマンガ地方においてタキ・オンコイ (Taki Ongoy. ケチュア語で「踊り病」を意味する) と呼ばれる、土着の神々を復活させるための「踊り」を伴う祭祀・儀礼が自然発生的に拡大し、植民地支配体制を揺るがす状況となった。先住民群衆によるこの騒動で日常生活が麻痺した。それは 1564 年 8 月もしくは 9 月ごろから数年間にわたって、クスコ司教区ワマンガ地方南東部のパリナコチャス地区を中心に広がった。およそ 8000 人の先住民がこれに関与したとして告発され、キリスト教への集団改宗を強いられたといわれている。

タキ・オンコイを水銀汚染問題と関連付けた最近の研究について述べておく。2015 年に日本の真鍋周三が「16 世紀ペルーにおけるタキ・オンコイの政治・社会的背景をめぐる試論」、『ラテンアメリカ・カリブ研究』第 22 号、39-54 頁とそのスペイン語版 [Manabe 2015] を発表し、水銀汚染問題との関係からタキ・オンコイを捉える視点を提起した。

2016 年にペルーのサンタ・マリア (公衆衛生学者・人類学者) が、「タキ・オンコイ—16 世紀ペルーにおける水銀中毒症」なるテーマで、タキ・オンコイと水銀中毒を関連付けた博士論文を著した。また 2017 年には「16 世紀ペルーにおける水銀とタキ・オンコイ」なるテーマで修士論文を執筆した。

本稿では、タキ・オンコイと、ワンカベリカ水銀鉱山に由来する水銀汚染問題との関係の一端を明らかにするべく、歴史学の立場に立って新たな解釈を試みる。本稿の内容は 10 分の 1 税徴収問題がタキ・オンコイの鎮圧とどう関係したのかを検討・考察する。

キーワード

タキ・オンコイ、ワマンガ地方、ワンカベリカ水銀鉱山と水銀汚染、10 分の 1 税とアルボルノス、強制的改宗

目次

- I はじめに
- II 16 世紀ペルーにおける俗権と教権
- III 研究史—特に水銀汚染との関連で
- IV ワマンガにおけるタキ・オンコイの出現と社会変化
- V タキ・オンコイの鎮圧：10 分の 1 税の確保と強制的改宗の推進
- VI おわりに

I はじめに

1560年代ペルーアンデス高地のワマンガ（Huamanga）地方¹においてタキ・オンコイ（*Taki Onqoy* [別名 *Aira*]) と呼ばれる、偶像崇拜（*idolatría*）行為を伴った騒動が発生・拡大した [増田 1984: 667]。タキ・オンコイとはケチュア語で「踊り病（*enfermedad del baile*）」を意味する。先住民群衆によるこの騒動で日常生活が麻痺した。これまでタキ・オンコイは、スペインの支配やキリスト教を否定し、アンデスに特有の土着の神々である「ワカ（*huacas, guacas*）」² [Albornoz 1990[1570]:64,93; Lexus 2007:313; Gabai 1990:351-353] の復活と新しい世界の到来を待望するペルー先住民による土着の宗教的抵抗運動とみなされてきた。それは1564年8月もしくは9月ごろから数年間にわたって、クスコ司教区（*Obispado de Cuzco*）ワマンガ南東部のパリーナコチャス地区（*Repertimiento de Parinacochas*）を中心に広がった。およそ8000人を超える先住民が土着的な歌と踊りに加わったとして教会に告発され、キリスト教への集団改宗を強いられたといわれている。それはやがてワマンガのほぼ全域に広がった [Albornoz 1990[1570]:64; Melgar y Carrasco 2007: 1-17,36,40; Pérez 1991:205; Stern 1982a:xvii,51; García 2000:112]。タキ・オンコイの報告者としては、スペイン人聖職者クリストバル・デ・アルボルノス（*Cristóbal de Albornoz*）がよく知られている。アルボルノスが記録した『功績報告書（*Informaciones de méritos y servicios*）』³ [Albornoz 1990[1569; 1570; 1577; 1584]] が基本史料として研究者の間で読み継がれてきた。タキ・オンコイの取り締まりを契機として植民地政府は、強制的改宗政策を強力に推し進めることになる。多くの研究者がこれまで、タキ・オンコイをさまざまなタイプの社会運動、例えば千年王国的運動などとして捉えその特徴に着目してきた [Melgar y Carrasco 2007:12-13; Millones 1973b:87; Wachtel 1973:120-121,136; ワシュテル 1984:273,283, 286-291,297-298; ワースレイ 1981]。

タキ・オンコイが発生した背景を調査・研究する場合、タキ・オンコイが起きた時期がペルーにおいてスペイン植民地支配が緒に就いたばかりの時代だったことや、その発生から収束までの期間がきわめて短かったことが留意されねばならないだろう。研究者は研究対象となる事柄や資料の制約に遭遇することになる。いうまでもなく、この事件は第5代ペルー副王トレド（*Francisco de Toledo*, 在位 1569~1581）の「改革」以前の時期に起きたこと、タキ・オンコイ展開の時代幅が事実上1564年から1570年までの数年間だったこと、さらには、アルボルノスがこの事件に遭遇したのが1569年9月頃であったというから、タキ・オンコイの鎮圧に要した期間はたいへん短い。

本研究に至った経緯についてここで述べておきたい。

1545年に発見されたポトシ銀山（*las minas de plata de Potosí*）の開発が急ピッチで進められることになったが、その労働力は周囲のエンコミエンダの先住民やインカ時代から開発されてきたポルコ（*Porco*）銀山などから到来した先住民に依存した。先住民共同体から徴収された労働者がポトシ銀山の採掘・精錬業務に従事したわけであるが、その徴収方式はインカ時代からのミタ（*mita*）制に基づいたものであった。1560年代になると鉱質が低下し、しかも地表から採掘現場までの距離が長くなったため、鉱石搬出が困難になる。そのため、鉱内での事故や災害の頻度が高くなり、また逃亡者が増加し始め、ポトシ近在の先住民労働力の消耗が激しくなった。先住民共同体ではその影響が出始めていた。またインカ時代から続いてきたワイラス（*huayras*）法による精錬に限界が生じたため、銀の生産にブレーキがかかってきた。そして1560年代後半から1570年代初めにかけて銀生産がひどく落ち込む事態を招いた。スペイン王権側からみるとこの「危機」を救ったのが1570年代前半期に行われた副王トレドによる改革、とくに精錬法の変更すな

¹ ワマンガ地方は現アヤクチョ県と現ワンカベリカ県にほぼ相当する。以下、ワマンガの地方とか地域といった名称表記を一括して「ワマンガ」と略称する。

² 「ワロチリ文書」を考察した大平によると、「ワカ」なる語は、「偶像およびその崇拝に関わるもの・場所」という意味でスペイン人が使用したという。当時スペイン人は、先住民が崇拝するワカの意味を十分に理解できていなかった [大平 2019:27]。

³ アルボルノスが教会組織内での地位向上をめざして、自らの功績や能力を主張するために1569年、1570年、1577年、1584年の4回にわたって作成した文書である。自身を三人称扱いで執筆している。

わち水銀アマルガム法のポトシへの導入と王権サイドからのミタ制の再編成であった。とくに水銀アマルガム法による銀精錬は、ペルーにおいて新大陸唯一の水銀鉱山であるワンカベリカ水銀鉱山（las minas de mercurio de Huancavelica）⁴が 1564 年 1 月から開発されていて、その水銀をポトシに運ぶことによって実現した。その結果出現した「官民混合事業」によってポトシの銀鉱業は未曾有の繁栄に転じ、莫大な富を生み出して、ヨーロッパにおける資本蓄積に関与するまでになった。1580 年ごろには国際商業都市ポトシが誕生する。世の富を示すのに「ポトシほどの価値（Vale un Potosí）」というセルバンテス（1547-1616）の言葉が当てはまるようになった。

しかしながら、水銀アマルガム法の導入とミタ制を二大柱とするポトシ繁栄の背後には、先住民の生存環境を損なう大変な問題が出現していたのである。すなわち水銀汚染の蔓延である。そしてこの水銀汚染はミタ制とも連動していた。

筆者がポトシ銀山研究を始めたのは 1978 年 4 月であった。水銀アマルガム法に注目して以来、水俣病をはじめとする日本の水銀公害のことが頭に浮かび、ワンカベリカ水銀鉱山における水銀汚染問題を調査したいと思い続けてきた。それは 2006 年に実現した「真鍋 2006」⁵。2013 年頃、偶然にタキ・オンコイを調査する機会が与えられ、その研究を開始した。一方で、2014 年 7 月に伊勢市で開かれた国際学会で拙稿「真鍋 2006」内容をスペイン語で発表したところ、出席されていたルイス・ミリヨネス（サン・マルコス大学）教授から貴重な助言を受けた。それはタキ・オンコイ参加者が身体に辰砂（cinabrio）を塗っていたというものである。このことが契機となって、タキ・オンコイの発生を水銀汚染の角度から捉えるという視点に着目した。

タキ・オンコイの発生原因を水銀汚染と結びつける研究の意義は、ラテンアメリカ植民地時代史研究において大変重要な意味を持つように思われる。2010 年代になって、植民地時代ペルーの二大鉱山であるワンカベリカ水銀鉱山とポトシ銀山における環境問題を告発したロビンスの研究書「Robins 2011; Robins 2017」⁶がたてつづけに刊行されており、サンタ・マリアの研究「Santa María 2016; Santa María 2017」と合わせて、国際的にこの水銀汚染問題研究の重要性が高まりをみせてきているからである。今後、ペルーのみならず植民地時代に重要な鉱山のあったメキシコのサカテカスやグアナフアト、ブラジルのミナス・ジェライス、スペインのアルマデンやスロベニアのイドリアなどの地域での水銀汚染問題研究や、日本の石見銀山や佐渡の金銀山研究等⁵にも広がっていくことが予測される重要なテーマである。またひいては現代世界の水銀汚染問題解明への架橋の一部となる可能性が考えられる。

本稿では、まずタキ・オンコイが生じた時期の俗権と教権の概要・状況を示した上で、タキ・オンコイの概要を述べる。そしてタキ・オンコイ発生の社会的背景として、ワマンガの諸鉱山、とりわけワンカベリカ水銀鉱山に由来する水銀汚染問題との関連性を歴史的観点から明らかにする⁶。水銀鉱山開発により悪化の一途を辿った先住民社会の状況を確認し、タキ・オンコイの鎮圧と 10 分の 1 税徴収の関連性を考察した上で、ワマンガにおける土着宗教の弾圧と強制的キリスト教化の深層を指摘したい。

II 16 世紀ペルーにおける俗権と教権

16 世紀ペルーでは「世俗権力」（以下、「俗権」と略称）と「教会権力」（以下、「教権」と略称）からなるスペイン植民地支配体制が形成されていく。「俗権」レベルでは 1542 年にペルー副王領が誕生する。首府は、1535 年に建設されていたリマ市である。続いて翌 1543 年にはリマのアウディエンス（Real

⁴ ワンカベリカ水銀鉱山は、「サンタ・バルバラ水銀鉱山」とも呼ばれた。

⁵ 筆者は、島根県教育庁文化財課世界遺産室・石見銀山世界遺産センターが主催する「海外鉱山比較検討会」のメンバーに就任して活動している。2019 年 9 月 4、5 日には新潟県佐渡市で開催された「佐渡金銀山と海外の歴史的鉱山との比較」セッションにおいてポトシ銀山やワンカベリカ水銀鉱山のケースについて意見を述べた。

⁶ 本稿は、サンタ・マリア論文において展開されているような公衆衛生学・人類学的見地からタキ・オンコイと水銀汚染との関係を説明するものではないことをあらかじめお断りしておく。

Audiencia de Lima)⁷が設置された。次に「教権」レベルについてみていくが、ここで問題提起をひとつしておきたい。ペルーにおける「教権」の命題つまり聖職者によるキリスト教布教 (evangelización) は先住民の精神的征服 (conquista espiritual) が目的であった [Perez 1991:233] と言われるが、もしそうであるなら、この「先住民の精神的征服」の目的とは具体的にはいったい何を指すのであろうか。

以下では、タキ・オンコイの考察にあたり、まず教権の関連部分からみていく。ペルーにおいて最初に創設された教会管区 (la Provincia Eclesiástica) はクスコ司教区 (Diócesis u Obispado de Cuzco) (1537 年創設) であった。これに続いて 1541 年にはリマ司教区 (Diócesis u Obispado de Lima) が、1552 年にはラ・プラタ (チャルカス) 司教区 (Diócesis u Obispado de La Plata [Charcas])⁸が創設された。布教活動は各派修道会宣教師 (レグラーレ[regular]) ならびにカトリック教会直属の教会組織に所属する聖職者 (セクラール[secular]) によって行われることになった。クスコ司教区の場合、先住民への布教が事実上開始されるのは 1550 年代後半期からである⁹。

ところで、セクラールの部門であるが、司教区が設置され、大聖堂が設立されると同時にその司教座聖堂参事会 (Cabildo Eclesiástico) なるものが創設された。これは永続的な常設の審議会であり、司教に仕える義務のある聖職者集団の機構であった [Pérez 1991: 206]。1550 年代はインカの末裔によるビルカバンバを拠点とする「ネオ・インカ (Neo-Inca de Vilcabamba. 1533-1572 年)¹⁰」の存続により、インカ王のもとにいた先住民の反スペインの抵抗運動 (1537~72 年) が継続中であった¹¹ [真鍋 2004:322-324]。時代はやがて第 3 代ペルー副王アンドレス・ウルタド・デ・メンドーサ、カニエーテ侯 (Andrés Hurtado de Mendoza, marqués de Cañete. 在位 1556-1560) の統治期にはいり、ペルーにおけるスペイン植民地支配が事実上始まる。その根拠は、ポトシ銀山の銀「5 分の 1 税 (quinto real)」の徴収記録がはじまったのが 1556 年からであることにもとづく。1565 年以降コレヒミエント (corregimiento)¹²が植民地ペルーに公式に導入されはじめる [真鍋 2004:318]。スペイン人聖職者はケチュア語やアイマラ語といった先住民語を自ら習得し、これを使用して先住民にたいしてキリスト教の布教 (evangelización) を行うのであった。以下では、クスコに誕生した司教座聖堂参事会に注目する。

そして農牧畜産物の 10 パーセントをスペイン人 (あるいはクリオーリョを含む白人) 事業主が教会に納めることとされた「教会 10 分の 1 税 (los diezmos, [以下、「10 分の 1 税」と略称]) [OCEANO 2000:542] の不払い問題とアルボルノスの登場、ビルカバンバのネオ・インカに言及する。

1537 年にクスコ司教区が設立されると同時にその司教座聖堂参事会 (以下、「クスコ司教座聖堂参事会」と略称) が創設された。これはクスコ司教区の権益を守るための永続的な常設の審議会であり、複数の司教座聖堂参事会員 (canónigos) によって構成される機関であった。司教座聖堂参事会員はさまざまな特権をもっていた。とくに重要だったのが 10 分の 1 税 [真鍋 2004:329] を主とする司教区収入の徴収・

⁷ 王立聴訴院。スペイン領植民地の司法行政機関。1 名の議長 (presidente) と数名のオイドール (oidores. 聴訴官) からなる

⁸ リマ司教区は 1546 年には大司教区 (Arzobispado de Lima) に、ラ・プラタ司教区は 1609 年には大司教区 (Arzobispado de La Plata o Charcas) にそれぞれ昇格された。

⁹ クスコ司教区の初代司教はドミニコ会士のビセンテ・バルベルデ (fr. Vicente Valverde. 在位 1537-1542)。第 2 代司教はフアン・ソラノ (fr. Juan Solano. [1563 年 1 月 1 日にソラノは辞職])。第 3 代司教はセバスティアン・デ・ラルタウン (Sebastián de Lartaún. 在位 1573-1583) であった。1563 年から 1573 年にかけての 11 年間、クスコ司教は欠員状態にあった。タキ・オンコイが発生したのはクスコ司教欠員のこの時期である。この期間、(後述のように) クスコ司教座聖堂参事会員が司教代理を務めた [Mena 1981:36-37, 40, 42, 45, 77]。その他、16 世紀ペルーにおける教権の成立については真鍋 [2004:328-330] 参照。

¹⁰ 「ネオ・インカ」の定義は、マンコ・インカ (Manco Inca. 在位 1533-44) からトゥパック・アマル (Túpac Amaru. 在位 1571-72) に至る新インカ王もしくは、ビルカバンバに拠点を設けた先住民反乱者の領域を指す意味とする。

¹¹ スペイン人によるクスコ占領の後、インカ王のあとがまにすえられたマンコ・インカは、クスコのスペイン人に対して反乱を起こす。1536 年 3 月から 1537 年 4 月までのクスコの包囲を行った。その後、ウルバンバ川近辺のオリヤンタイタンボ (Ollantaytambo) 砦に退却し、最終的にビルカバンバ (Vilcabamba) に撤退しそこに拠点を設けた。1544 年、マンコ・インカはスペイン人によって殺された。その後を継いだのが長男のサイリ・トゥパック (Sayri Túpac. 在位 1544-60) である [増田 1977:358-361 ; ワシュテル 1984:273-281]。

¹² コレヒミエントは地方行政官であるコレヒドールによって支配・管理された。

配分を執り行ったことである。また司教が死亡したときとか不在となった際には司教の代理を務めた。司教区に属する司祭の収入（*capellanías*）の運営者でもあった。彼らは定期収入として、集められた 10 分の 1 税のうちの 4 分の 1 という莫大な聖職禄を享受した。また「教会巡察使（*visitador eclesiástico*）」として司教区内の地方を視察した場合は臨時収入が入ったから、彼らは自分たちを教会巡察使に指名してもらおうとクスコ聖堂参事会に懇願するのが常であった [Pérez 1991:206-207]。

クスコ司教区は 1537 年の設立当時、現在のコロンビアに相当するヌエバ・グラナダからチリにまでおよぶ広大な領域を含んでいた。後になって、リマ、リオ・デ・ラ・プラタ、サンティアゴ・デ・チレ、ポパヤン、キト、チャルカスの司教区がクスコ司教区から分かれて設立されると、クスコ司教区の管轄区域は当然ながら縮小した。しかしクスコ司教区の管轄区域はクスコ、ワマンガ、ラ・パス、アレキパなどペルー副王領の主要な地域を含み、収入の点では南米大陸において最も豊かな司教区のひとつであることには変わりはなかった。

クスコ司教区にとって重要な収入源は疑いもなく 10 分の 1 税であった。しかし 10 分の 1 税の徴収は歴代の司教にとって頭痛の種であった。初代司教ビセンテ・デ・バルベルデ（fr. Vicente de Valverde. 在位 1537-1542）やその継承者であるフアン・ソラノ（fr. Juan Solano. 在位 1544-62）は、このことでクスコ、ワマンガ、アレキパのエンコメンデーロ（*encomendero*）¹³たちと争い続けた。というのも、エンコメンデーロは常に 10 分の 1 税の支払いを拒んでいたからである。この税金を彼らに支払わせる方策が当時は欠如していた。クスコ聖堂参事会は、エンコメンデーロが実質上先住民から徴収していた 10 分の 1 税を教会に支払うよう要求した。ソラノ司教は 1551 年 2 月 8 日付けの国王宛書簡において、クスコ司教区内のエンコメンデーロが 10 分の 1 税を支払わないため訴訟を起こす方針であると述べている [Pérez 1991:207-208]。翌 1552 年にクスコ聖堂参事会は、本件について国王に請願書を提出するとともに、リマのアウディエンスシアに提訴した。裁判は 10 年以上にわたって続けられた。1564 年になってようやく判決が下った。クスコ聖堂参事会側の勝訴であった。

しかしそれにもかかわらず、エンコメンデーロは以後も 10 分の 1 税の支払いを拒んだ¹⁴。ペルーではエンコメンデーロと植民地政府（王権）間の対立が根本的に存在しており、1560 年代に入ると「エンコミエンダの永続性（世襲制）（*perpetuidad de encomiendas*）」をめぐる争議が起きる。王権は、エンコミエンダ制に代わってコレヒドール制の導入による新たな体制づくりを目論んでいた。1561 年 3 月 24 日付けで、第 4 代ペルー副王ニエバ伯（Diego López de Zúñiga y Velasco, Conde de Nieva. 在位 1561-64）統治下の植民地政府は、各地方の市参事会・カビルド（*cabildo*）[真鍋 2004:327] に書簡を送り、「永続性」について審議するよう公式に通達した。それは聖職者や先住民共同体首長・クラカ（*curaca*）も巻き込んで一大騒動に発展する。「永続性」に反対する考えが優勢となるや、1563 年にはこれに反発して、クスコにおいてエンコメンデーロの蜂起が起きた。結局、ペルーにおいてコレヒドール制が導入され始めたのは 1565 年 4 月以降のことであった。当時はロペ・ガルシア・デ・カストロ（Lope García de Castro, Cuarto Gobernador. 在位 1564-69）の統治期にあたる¹⁵ [Gabai 1990:384-387; Millones 1990: 21]。そしてワマンガにも「地方」が

¹³ エンコミエンダの主。エンコミエンダ（*encomienda*）制とは、新大陸征服過程でスペイン王権が征服者に一定数の先住民の支配・管理を委託し、先住民のキリスト教教化を義務づける代わりに徴税権と労役権を与えた制度。エンコメンデーロからみると、支配下の先住民にキリスト教を布教し先住民を保護しなければならなかった（義務）。そしてその見返りとして先住民から貢納（*tributo*）や労役（*mita*）を受けとる権利をスペイン王権から得た。エンコメンデーロは本質的に「事業主」「経営者」であった。聖職者がエンコメンデーロを兼ねるケースも珍しいことではなかった。例えば、ドミニコ会士で、1532 年 11 月のカハマルカにおいてアタワルパ王と会見し、その後、初代クスコ司教に就任したバルベルデ神父、リマ司教・大司教ロアイサ師（fr. Jerónimo de Loaysa, Primer Obispo-Arzobispo de Lima. 在位 1541-1575）もまたエンコメンデーロであった [真鍋 2004:302,312,329]。

¹⁴ リマのアウディエンスシアへクスコ聖堂参事会の代理人として出席した聖堂参事会員はバルタサル・デ・ロアイサ（Baltasar de Loayza）であった [Pérez 1991:208]。

¹⁵ ニエバ伯は 1564 年 2 月 19 日に死去。ガルシア・デ・カストロがペルーに到着したのは 1564 年 10 月 25 日であった。

設けられ、コレヒドールが登場する¹⁶。

1568年にクスコ聖堂参事会は、「ワマンガの先住民がエンコメンデーロに支払った10分の1税を速やかに徴収せよ」との最終的な判決(ejecutoria)をリマのアウディエンシアから受け取った[Pérez 1991:209]。同年10月、この判決を実行に移す任務にあたる人物をワマンガに派遣する旨が決定され、そこで選ばれたのがクリストバル・デ・アルボルノスであった。彼は1567年初頭にヌエバ・グラナダからピウラを経由してクスコに到着しており、1568年にはアレキパ地方を巡察した後¹⁷、翌1569年、ワマンガの巡察に出向く。彼はクスコ異端審問所委員(comisario de Santo Oficio)でもあった。それから数年間にわたり、パリーナコチャスとアンドワイラス(Andahuaylas)両地域を中心に任務に就くのであったが、そのとき遭遇したのがタキ・オンコイであった。アルボルノスは最初から偶像崇拜の撲滅を目指してワマンガに出向いたのではない。10分の1税の徴収を推進・達成するために現地に出向いたのである。そこで彼が察知したタキ・オンコイは偶然の発見の結果であった。タキ・オンコイはこの時点ですでにワマンガの大半のエンコミエンダに拡大していた。1570年にアルボルノスは副王トレド宛の『功績報告書』をワマンガにおいて記した。その情報源をパリーナコチャスの場合は当地の司祭ルイス・デ・オルベラ(Luis de Olvera)¹⁸に、またチョコロボス(Chocorvos)、ルカナス(Lucanas)、ソラス(Soras)¹⁹の場合は、ワンカベリカ水銀鉱山の発見者であるアマドール・デ・カブレラ(Amador de Cabrera)²⁰らの証人に負った。1564年という年は重要である。ルイス・デ・オルベラによるタキ・オンコイ出現の報告年とアマドール・デ・カブレラによるワンカベリカ水銀鉱山の採掘登録年が一致するからである[Santa María 2017:66]。『功績報告書』においてアルボルノスは「偶像崇拜」の発見を自らの功績と広言していた[Millones 2007:48; Pérez 1991:211; Ramos 1992:151,155]。1571年、アルボルノスはワマンガからクスコに戻り、副王トレドに謁見し報告書を手渡した[Pérez 1991:212-213]。

クスコ聖堂参事会の利益を侵害したのはエンコメンデーロだけではなくた。ビルカバンバのインカのもとにあった先住民は、溪谷部や道路を定期的に占拠することによってスペイン人に敵対してきた。ビルカバンバから放たれた先住民軍が、クスコ地域とワマンガを通過する幹線道である「王の道(Camino Real)²¹」を繰り返し攻撃した。この幹線道はポトシとリマを結ぶもので、銀をはじめとする商品や物資の交易路であり、植民地政府当局や王権にとってきわめて重要な存在であった[真鍋 2004:322]。ネオ・インカの先住民はスペイン人の所持品の一部、とりわけ武器や馬といった軍事用品を戦いで獲得したり取引を通じて入手した。植民地政府にとって、ワマンガ南東部からクスコ地域北西部にかけての一带では俗権、教権ともにその力が大きく弱まっていた。クスコ聖堂参事会にとってビルカバンバ地方の平定は重大な関心事であった。1566年10月下旬にクスコ聖堂参事会は聖職者ペドロ・デ・ミランダ(Pedro de Miranda)

¹⁶ ワマンガの場合、エンコミエンダやエンコメンデーロは排除されず存続する。つまりエンコメンデーロとコレヒドールは併存する。

¹⁷ アルボルノスの履歴については、Pérez [1991:210-211] 参照。

¹⁸ オルベラは1564年にタキ・オンコイを最初に目撃した人物である。パリーナコチャスの主任司祭はクリストバル・デ・モリーナ(Cristóbal de Molina)であり、オルベラはモリーナにタキ・オンコイについてまず報告し、モリーナがこれを正式に公開したといわれている。

¹⁹ ソラスはルカナス地域に所属しており、ルカナス地域東部に位置した。

²⁰ ワンカベリカ水銀鉱山は1563年にアンガラエスのカシケが、アコリアとワンド(両村はいずれも現ワンカベリカ市の北方近郊に位置する)のエンコメンデーロであったアマドール・デ・カブレラに辰砂(cinabrio、硫化第二水銀、赤色硫化水銀)の大規模な鉱床を教えたことに始まる。1564年1月1日、カブレラはワマンガ市長ロペ・デ・バリエントス(Lope de Barrientos, alcalde ordinario de la ciudad de San Juan de Guamanga/Huamanga)に対しサンタ・バルバラ(Santa Bárbara)水銀鉱山の採掘権の申請を行ったことから、彼は「ワンカベリカ水銀鉱山の発見者」として知られるところとなった(サンタ・バルバラ水銀鉱山はワンカベリカ水銀鉱山の中心をなす)。デスクブリドール鉱を所有するに至った[Robins 2011:23; 真鍋 2006:23-24]。アマドール・デ・カブレラはスペインのクエンカ(Cuenca、現カステーリャ＝ラ・マンチャ州クエンカ県)生まれ。後に第3代ペルー副王になるカニエーテ侯の従者(criados)の一人として1555年にペルーに渡る。4年後(1559年)にはワマンガ市参事会員(regidor del cabildo de Huamanga)となっていた[Lohmann Villena 1999:24-29; 真鍋 2015:52]。

²¹ 「銀の道 Camino de Plata」とも呼ばれた。

を選出し現地に派遣した。ネオ・インカの王ティトゥ・クシ・ユパンキ (Titu Cusi Yupanqui. 在位 1560-71) とその配下の人々に公教要理を授けるためであった [Pérez 1991:209-211; ティトゥ・クシ・ユパンギ (述) 1987 [1570]]。

ビルカバンバにおけるネオ・インカ王の抵抗を封じ込めようとする俗権レベルでの対策は早くから行われてきた²²。ネオ・インカ対策から見えてくるのは、植民地政府当局がネオ・インカの抵抗に悩まされ、マンコ・インカの殺害後は、「武力鎮圧」によるのではなく「懐柔策」を選択している点である。その理由はいったい何だったのか。その答えは、第一に、当時の植民地政府にこれを鎮圧するだけの軍事力がなかったこと、第二に、ポトシ市 (ヤクスコ市) とリマ市を結ぶ交易路 (幹線道) が危機に晒さらされたため、とにかくその維持・保全を最優先することにあつたと考えられる²³。

ここで 10 分の 1 税不払い問題に関して敷衍しておく。エンコメンデーロによる 10 分の 1 税の不払いはワマンガに限られたことではなかった。その原因の一つは、植民地支配体制がいまだ確立していない当時のペルーにおける社会的混乱、すなわち、俗権はもとより教権の脆弱性にあつたと判断される。とくにワマンガの場合、聖俗両権力脆弱の原因の一つは、スペイン植民地支配に抵抗するネオ・インカと隣り合わせの場所に位置しており、ネオ・インカの影響による社会的混乱という要因 [Rojas Punciman 2015] を考慮する必要がある。

Ⅲ 研究史—特に水銀汚染との関連で

2006 年に筆者が「植民地時代ペルーにおけるワンカベリカ水銀鉱山と水銀汚染問題—植民地時代前半期—」を発表した [真鍋 2006:19-55]。そしてその内容を 2014 年に伊勢市 (於：南山大学伊勢海浜センター) において開催されたアンデス・アマゾン学会第 3 回研究大会においてスペイン語で報告した²⁴ [Manabe 2014]。2015 年には「16 世紀ペルーにおけるタキ・オンコイの政治・社会的背景をめぐる試論」を著し [真鍋 2015:39-54]、そのスペイン語版 [Manabe 2015:92-110] を刊行した。この二つの論考の結論部分では、踊りと身体への震えの関連性を示唆した上で、次のように指摘した。

タキ・オンコイの解明においては、これまでほとんど指摘されなかったことであるが、「16 世紀

²² 1548 年頃、リマ・アウディエンシア議長ペドロ・デ・ラ・ガスカ (Pedro de la Gasca. 在位 1547-50) はサイリ・トゥパックに使節を送り、スペイン国王への帰順を促した。第 3 代ペルー副王カニエーテ侯のとき、数度にわたる交渉の末、サイリ・トゥパックとの和解に漕ぎ付いた。しかしながらサイリのあとを継いだ弟のティトゥ・クシはスペイン人の支配を拒んだ。副王代理ロベ・ガルシア・デ・カストロは新たに使節や布教団を送って、ティトゥ・クシの懐柔を開始した。先述のビルカバンバへのミランダの派遣はこの流れの一環をなす。その結果、ティトゥ・クシは、1567 年、スペイン国王に忠誠を誓い、翌 1568 年には洗礼を受け入れた。しかし再度にわたるロベ・ガルシア・デ・カストロの呼びかけにもかかわらず、ティトゥ・クシはビルカバンバの奥から姿を現すことはなく、和平交渉は行き詰まる。1571 年 5 月にティトゥ・クシは病死する [真鍋 2004:322-323]。

²³ ティトゥ・クシとの和平交渉に臨んだ人に植民地政府役人フアン・デ・マティエンソ (Juan de Matienzo. 1510-1579. [チャルカスのアウディエンシアのオイドール (oidor. 聴訴官)]) がいる。マティエンソは法律家にして事業主でもあり、植民地政府官僚としてポトシ銀山の運営・管理をはじめ、植民地建設に情熱を注ぐ人であった。1567 年に『ペルーの統治 (Gobierno del Perú)』を上梓し、自己の政治的見解を表明している [Matienzo 1967[1567]]。マティエンソはネオ・インカの脅威を排除しようとした。マティエンソによる対策の動機には、ポトシとリマを結ぶ幹線道の安定・保全をはかる意図があつたものと判断される。ハウハにおいては 1565 年頃ワンカ人 (los Huanca) による反乱計画が発覚し、副王領辺境では敵対的な先住民集団による襲撃が繰り返されていたこともあり、当局は窮地に追いやられていた。マティエンソはティトゥ・クシとの交渉によって、1566 年には和平条約の締結にまでこぎつけたものの、しかし結局、目的を果たすことができなかった。マティエンソの懐柔策は失敗に終わり、また当時深刻になっていた中部山岳地帯における先住民人口の減少 [真鍋 2004:311] に歯止めをかけることもできなかった。マティエンソは、ペルー植民地の政治・経済を維持するうえで「コレヒドール」の配置や「ミタ (強制労働)」の必要性を痛感するにとどまった [Stern 1982a; 増田 1984:666-667; ワシュテル 1984:281-283]。

²⁴ この国際学会において、(タキ・オンコイに関する史料を発掘し世界に紹介した人類学者の) ルイス・ミリヨネス教授より興味深いコメントをいただいた。それは、タキ・オンコイに参加していた先住民の多くが身体に辰砂を塗っていたというものである。

ワンカベリカ水銀鉱山と水銀汚染問題」の理解が必要であろう。今後の課題として、水銀鉱山と水銀汚染問題との関係からタキ・オンコイをめぐる議論を深めることが可能なのではあるまいか〔真鍋 2015:54〕。

En la dilucidación del Taki Onqoy, sin embargo que no ha indicado hasta ahora, se necesitarán el entendimiento de las minas de mercurio de Huancavelica y el problema de la contaminación de azogue en el siglo XVI. Como las futuras investigaciones, creo que podremos profundizar la discusión de Taki Onqoy por una relación con las minas de mercurio y el problema de la contaminación de azogue [Manabe 2015:107] .

タキ・オンコイの原因を水銀と結びつけた最近の研究²⁵についてここで述べておきたい。2016 年にペルーの公衆衛生学者・人類学者のサンタ・マリア（Luis Alberto Santa María Juárez）が、「タキ・オンコイー 16 世紀ペルーにおける水銀中毒症（Taki Onqoy: epidemia de intoxicación por exposición al mercurio en el Perú del siglo XVI）」なるテーマで、公衆衛生学の立場からタキ・オンコイと水銀中毒を関連付けた博士論文 [Santa María 2016] を書いてペルー国立フェデリコ・ビリャレアル大学に提出した。また 2017 年には「16 世紀ペルーにおける水銀とタキ・オンコイ（Mercurio y Taki Onqoy en el Perú del siglo XVI）」なるテーマで人類学の修士論文 [Santa María 2017a] を書いてペルー・カトリック大学（PUCP）に提出した。サンタ・マリアは「タキ・オンコイは水銀中毒や水銀汚染が原因で発生した」との指摘を博士論文と修士論文で行ったわけであるが、この 2 つの論文には上述の Manabe [2015] が引用・収録されている [Santa María 2016:28-32,331; Santa María 2017a:26,234]。よってこれらサンタ・マリアの両論考は Manabe [2015] に影響されて書かれたものであることがわかる²⁶。

「タキ・オンコイは水銀汚染が原因だった」との指摘がペルー国側からも出現したわけであるが、この点をめぐって、ペルーの内科医・パモ・レイナ（Oscar G. Pamo Reyna）による論評記事 [Pamo Reyna 2017-2018] も書かれた。そこでも Manabe [2015] が引用されている [Pamo Reyna 2017-2018:49]。

タキ・オンコイを、これに参加した人々が水銀中毒（la intoxicación por mercurio/ el azogamiento）に罹っていたという視点から説明する場合、双方の関連を具体的に検証し証明する必要があるが、しかしこのことは容易ではない。サンタ・マリアは日本の熊本県で起きた水俣病や環境汚染問題に触れている [Santa María 2016:213,221-224; Santa María 2017a:28,42] が、日本の水俣病の熟知者である原田正純の研究成果をはじめ日本における水銀汚染問題の研究が考慮されておらず、まことに残念である。また、水銀中毒や水銀汚染問題をめぐっては、「無機水銀中毒（la intoxicación por mercurio inorgánico）」と「有機（メチル）水銀中毒（la intoxicación por mercurio orgánico/ metílico）」の相違点を十分に踏まえたうえで考察を進める必要がある。無機水銀中毒とは、水銀との直接接触によって引き起こされる水銀中毒を指す。有機水銀中毒とは、メチル水銀を直接摂取するかもしれない、環境中のメチル水銀を、食物連鎖を介して摂取することによって引き起こされる水銀中毒である [原田 2002 : 32、49-51 ; 原田 1985:191]。言うまでもなく「水俣病は環境汚染に由来し食物連鎖を通じておこった有機（メチル）水銀中毒」つまり公害である²⁷ [熊本学園大学水俣学研究センター・熊本日日新聞社 2012:51,56-58,60-61,63,68,73]。2006 年の拙稿は、ワンカベリカ水銀鉱山の労働者が被った汚染の分析を無機水銀による汚染の分析にとどめている [真鍋 2006]。水銀中毒症とタキ・オンコイとの関係を科学的見地から探る場合、症例の分析が欠かせないと思うが、16 世紀という遠い過去のことであ

²⁵ これまでタキ・オンコイの研究に従事してきた学者はたくさんいる。真鍋 [2015] や本稿の参考文献リスト覧に名前を記載した方々がとくに有名である。網野徹哉はガブリエラ・ラモス（ペルーの歴史学者）のタキ・オンコイ研究を高く評価している [網野 1995:129,144,146]。

²⁶ サンタ・マリアの研究の概要を知るうえで、その要旨ともいえる簡潔な論考がある [Santa María 2017b]。この記事においても彼は、アルボルノスと行動を共にしたとされる先住民ワマン・ポーマ（Guamán Poma）の絵図を引用にて水銀中毒症を患った先住民の様子を伝えようとしている。水銀中毒症そのものの実態を把握するうえでそれらの絵図の解明が必要となるであろう。

²⁷ 現代のラテンアメリカにおける水銀汚染問題については、[熊本学園大学水俣学研究センター・熊本日日新聞社 2012:256-274] に述べられている。

り、その方法をどこに求めればよいのだろうか。例えば、タキ・オンコイに参加した者の骨や毛髪を収集して、それを（公衆衛生学や法医学的に）分析しそこに水銀の痕跡があるかどうかを調べるという方法が考えられるが、その手法は今日において果たして可能なのであろうか。

IV ワマンガにおけるタキ・オンコイの出現と社会変化

本章では、まずタキ・オンコイの出現を考察する。次にエンコミエンダが支配的であったワマンガにおける先住民の生存環境の悪化についてみていく。その過程で鉱山とりわけワンカベリカ水銀鉱山における（先住民に対する）強制労働であるミタ（*mita*）の義務が浮上する。そしてタキ・オンコイがもたらした先住民のサボタージュの社会的影響について述べる。

IV-1 タキ・オンコイの出現

タキ・オンコイが発生したワマンガは、ワンタ（Huanta）²⁸、アンガラエス（Angaraes）²⁹、チョコルボス（カストロビレイナ[Castrovirreina]を含む）、ビルカスワマン（Vilcashuamán）、ルカナス（ソラスを含む）、アンダワイラスとパリナコチャス³⁰からなった（地図1）[Gavai 1990:385; Stern 1982a:xv-xvii]。ワマンガに土着宗教を導く者、つまりシャーマン（chamán）、占い師（adivino）、そして呪術師（mago）が数多く存在していたことは確かである。タキ・オンコイにおいて説教師の多くは土着の祭祀に没入する先住民共同体の構成員であったと考えられるが、指導者のひとりと目されるフアン・チョクネ（Juan Chocne）³¹もその例外ではなかったようだ。チョクネはパリナコチャスのクラカにしてシャーマンであったという。彼は超自然的存在と交信する力を持ち、ワカ信仰を広めるのに尽力したといわれている。人々に説教する際には、サンタ・マリア（Santa María）とかサンタ・マリア・マグダレナ（Santa María Magdalena）と名乗る、土着の神々に仕える2人の女性を伴ったという[Melgar y Carrasco 2007:25-26,32,53-54; Millones 1973a]。

タキ・オンコイの様子についてアルボルノスは次のように語っている。

（人々は）円形になって歩きながら踊り震えていた。その踊りでは悪魔や自分たちのワカや偶像に祈っていた。踊りではイエス・キリスト信仰を強く否定し、背教の姿勢を示していた。キリスト教徒や司祭からのあらゆる教えを拒否していた……[Albornoz 1990[1584]: 205]。

タキ・オンコイ発見の発端となったのは、1564年にパリナコチャス教区のスペイン人司祭ルイス・デ・オルベラが、同教区において先住民を魅了するワカ信仰を察知したことにはじまる。アルボルノスはタキ・オンコイを次のように描写した。

……その巡察において、司教座聖堂参事会員のクリストバル・デ・アルボルノスは、インディオや土着の人々の間でその土地全体にばらまかれた新しいキノコを発見した。それはタキ・オンコイと呼ばれる。その根本は一般的にはインディオが信じさせられたもので、王国のすべてのワカがキリスト教徒を焼き尽くし葬り去るというものである。ワカは蘇り二つの場所に分散している。つまりあるワカは王国の二つの本営であるパチャカマの、また他方はティティカカのワカと共にある。

²⁸ ビルカバンバのネオ・インカのもとにある先住民反乱軍に対する備えの一環として、1539年に建設されたワマンガ市（現アヤクチョ市）を含む。ワマンガ市の正式名称はサン・フアン・デ・ラ・フロンテーラ・デ・ワマンガ（San Juan de la Frontera de Huamanga）である[増田 1977:360]。

²⁹ 1571年もしくは1572年、標高3680mの高地に建設されることになるワンカベリカ市（ciudad de Huancavelica。正式名称は「ビリャ・リカ・デ・オロペサ[Villa Rica de Oropesa]」）を含む。

³⁰ パリナコチャスにおける教権の浸透については、Melgar y Carrasco [2007:28]を参照。

³¹ フアン・チョケ（Juan Choque）との表記もある。

そして神・我らの主であるイエス・キリストと戦う準備をしている…土地のスペイン人は敗者となり死んでしまうだろう。というのもワカは彼ら全員を殺す目的で病をもたらす……ワカはインカ時代におけるように石、木、泉の中に存在するのではない。そうではなく、インディオの体の中に入ってしまった。ワカが体の中にあるため、震えが起きるのである…そして顔を赤色で塗る…インディオは体に入ったワカや偶像を崇拝する。それらに肉、衣類、銀、トウモロコシなどを供える。ワカや偶像は、神・我らの主であるイエス・キリストに対して、また我がキリスト教に対して激しい嫌悪を表す…本証人は、パリナコチャ地方で 64 年に通知された、王国全体に広がったその誤りと背教を見て、それが正されんことを理解した。司教座聖堂参事会員のクリストバル・デ・アルボルノスは、調査しながら歩いたその場所で、インディオが背教を根気よく続けてきたこと、今も続けていること発見した。神・我らの主であるイエス・キリストの礼拝を埋め合わせよう、視察したあらゆる場所で命じた。発見された多くのワカや偶像を燃やすよう、神官達を罰するよう命じた [Albornoz 1990[1577]:177-178] 。

キリスト教を否定する説教師たちや予言者たちは、キリスト教によってワカが征服されたために無秩序が生み出され、流行病が蔓延し、人々が死に見舞われたとした。世界を転換させる必要があることを先住民に告げ、ワカの再生を説いた。ヨーロッパ風の衣装着用や食品摂取を拒否することなどが申し合わされ、終末の雰囲気は漂う踊りに拍車がかけられたという [Melgar y Carrasco 2007:54; Millones 1973b:87; Stern 1982b:52] 。

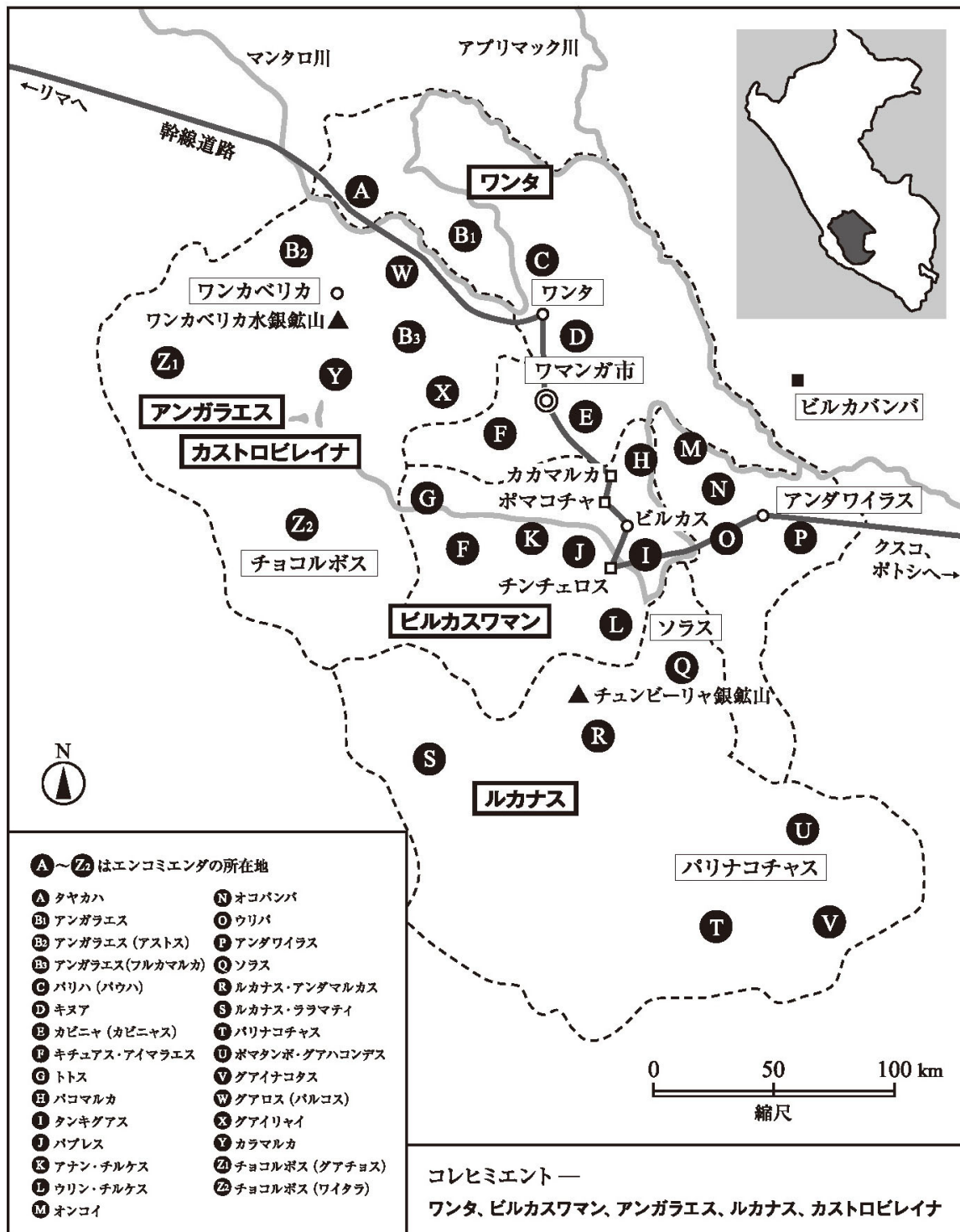
1565 年にスペイン人メルチョル・パロミーノ (Melchor Palomino) のエンコミエンダ (地図 1 : Q) にいたソラスの人々 (los soras) はほとんどがタキ・オンコイに身を投じていたといわれている。アルボルノスに同行し、先住民言語も用いて説教にあたった司祭ヘロニモ・マルティン神父 (padre Gerónimo Martín, clérigo presbítero) の証言によれば、ソラスの一带では、先住民が 1100 ほどのワカを礼拝していたという。またアルボルノスは、インカ時代に先住民が礼拝していたワカの数 6000 以上とし、今も先住民は多くのワカを崇敬していると述べている [Albornoz 1990[1570]:64-65; Albornoz 1990[1584]:274-278] 。

パリナコチャスの司祭であったルイス・デ・オルベラ神父もしくはその上司で主任司祭のクリストバル・デ・モリーナ (Cristóbal de Molina. 1529-1585) ³²がタキ・オンコイ発見の報をクスコやリマ、チャルカスの教会本部に伝えた。後にアルボルノスによって行われた調査によると、ワマンガにおいてタキ・オンコイには数千人が参加していたという。また、アルボルノスの偶像崇拝取り締まり遊説の直後に 8000 人以上の先住民が有罪になったという [Stern 1982a:51] 。

IV-2 ワマンガ先住民の生存環境の悪化

1560 年代のワマンガは、リマ、クスコ、ポトシを結ぶ道路が貫通する商業上の中間地点であると同時に、ネオ・インカの反乱者が立てこもるビルカバンバに近い辺境の地であった。ネオ・インカが滅亡する (1572 年) までの時期のワマンガは、ペルー副王領においてとくに開発が遅れた場所であった。当時のワマンガは地政学的にはまことに周辺部であった。産業としては小規模な金・銀鉱山の開発かあるいは零細な農牧畜業が存在する、アンデス高地一般によくみられた風土であった。しかしながらワマンガには新大陸で唯一無二の水銀鉱山が存在した。後に、ポトシと並んでペルー経済を支えることになった二大重要鉱山のひとつであるワンカベリカ水銀鉱山である [Salas de Coloma 1998:29; Stern 1982a:4-5]。ワンカベリカ水銀鉱山はスペインのアルマデン (Almadén) やスロベニアのイドリア (Idria) と共に、世界三大水銀鉱山のひとつとして新大陸はもとよりスペイン本国やヨーロッパにおいてもたいへん有名となる。しかしそれは後の 1570 年代以降のことである。ワンカベリカ水銀鉱山の発見は 1563 年でありその採掘が始まったのは

³² 『インカの神話と儀礼の報告書 (*Relación de las fábulas y ritos de los Incas*) 』を著したクロニスタ (年代記作者) [Molina 1959[1575]] 。



地図1 16世紀ペルー副王領ワマンガ地方の政治的形成（コレヒミエントとエンコミエンダ）

[Salas de Coloma [1998:35] および Millones [1990:20] を基に作成（作図：へんな優）]

翌1564年である。ちょうどタキ・オンコイの出現年と同じ年であった。そしてこの水銀鉱山は、18世紀末まで膨大な量の水銀を生産し続けた〔真鍋 2019a〕。

タキ・オンコイが発生した頃、ワマンガで暮らしていた先住民の社会的生存環境はどうだったのだろうか。まずは人口動態からみておく。1560年時点におけるワマンガの先住民人口（27万8724人）は、1530年時のそれ（44万5726人）に比べて63%に減少していた〔Millones 2007:27〕。主要原因はスペイン人の

征服ならびに流行病の発生に伴う先住民人口の減少 [Cook 1999:346] である。しかしこの減少状況は、ワマンガにのみ特有のものではない [Pérez 1991:58]。

当時のワマンガを特徴づけていたものにエンコミエンダ制の浸透がある。ルイス・ミリヨネスは、1565年のワマンガには 23 のエンコミエンダがあったとし [Millones 1990:20]、またサラス・デ・コロマは 29 のエンコミエンダの所在を特定している (地図 1 参照)。当時、ペルー副王領全体のエンコミエンダの数は 274 であったから、それはペルー全体の約 8.4 %から 10.6%にあたり、エンコミエンダ数は比較的多いほうであった。各エンコミエンダが擁した先住民の労働者人口すなわち 18 歳から 50 歳までの成年男子人口 (tributarios) についてみると、ペルー副王領の平均が 1 エンコミエンダにつき 500 人以下であったのに比べ、ワマンガの場合、36.6%のエンコミエンダがこれを上回り、1 エンコミエンダ当り「500 人以上 1000 人未満」であったという³³。エンコメンデーロが本質的に事業主であり経営者であるというのはワマンガの場合も例外ではなかった。事業主としてその業種は農牧畜業、手工業、鉱業、輸送・商業等であったが、業種を問わずエンコメンデーロにとっては、支配下にいた先住民の労働力が頼みの綱であった。エンコメンデーロは地理的・地域的特性に応じて配下の先住民労働力を各業種に投入した。ワマンガの場合、とくに鉱業に触手を伸ばすエンコメンデーロが圧倒的に多かった。例えば、ワマンガ市長 (alcalde ordinario) のアントニオ・デ・オレー (Antonio de Oré) の場合を見ると、彼はビルカスワマンのアナン・チルケス (Hanan Chilques) のエンコメンデーロ (地図 1:K) であり、ルカナスのチュンビーリャ銀鉱山 (las minas de plata de Chumbilla) を経営していた。また後には、ワンカベリカ水銀鉱山の経営に着手している [Salas de Coloma 1998:44]。エンコメンデーロたちは、1539 年にワマンガ市建設の主体となり、また 1540 年 4 月におけるワマンガ市参事会 (Cabildo de Huamanga. 以下、「市参事会」と略称) 形成の主役ともなった。市参事会員 (regidor) の要職を彼らは独占し、市参事会を牛耳った。

16 世紀ワマンガではワンタ、ビルカスワマン、アンガラエス、ルカナス、カストロビレイナという 5 つのコレヒミエント (corregimiento. 地方行政区) が誕生していた³⁴。これらのうち、ルカナスやソラスではとくにキリスト教布教が停滞気味であった。布教に従事する聖職者の数が比較的少なかったのもその一因であろう³⁵。さらに当時のワマンガでは教区司祭 (doctrineros) や修道会士など聖職者の多くは事業主であり、先住民への布教に熱が入らなかったためである。彼らは鉱業を筆頭に農牧畜業、輸送業、商業に身を投じ聖職者らしからぬ暮らしぶりだった。教会や修道院を隠れ蓑に先住民に無償労働奉仕を強いた [Stern 1982a:46; Millones 2007:25-26]。司祭による先住民の虐待という事件も起きていた [Melgar y Carrasco 2007:58]。教権内部の対立も発生していた。例えば、パリーナコチャスにおいては在俗司祭と修道会 (ドミニコ会) との関係がうまくいっていなかった³⁶。

ワマンガにおける先住民の生存環境が 1560 年頃から急激に悪化したのは、鉱山における労働強制が原因であった。というのも、タキ・オンコイ発生当時のワマンガは鉱山開発ブームの渦中にあり、先住民に課せられた鉱山労働の厳しさは筆舌に尽きた。エンコメンデーロや聖職者の命令によって、1560 年以降、先住民がワマンガ市近郊のアトゥンスーリャ銀鉱山 (el cerro de las minas de Hatunsulla o Atunsulla)、ワン

³³ 事業主としてのエンコメンデーロの収入源としては、鉱山業以外では農牧畜業があった。配下の先住民労働力を自己の大農園 (hacienda) や牧畜用地 (estancia) に投入することで、食糧品、毛織物、コカ、獣脂 (ろうそくの原料) 等を入手し、それをリマヤクスコ市、ポトシの大市場に提供した。また織物工場の経営や輸送業、幹線道沿いにある宿泊施設の運営にも手を染めた [Stern 1982a:36-37]。

³⁴ 1609 年にワマンガ司教区 (Obispado de Huamanga) がクスコ司教区から分離し誕生したのと同時に、コレヒミエントの数は増え一先述の 5 地方にワンカベリカ (ワンカベリカ地域にコレヒミエントが設置されかけたことがあったけれども、正式にコレヒミエントが設置されたのは 1601 年のアンガラエス地方の誕生による [真鍋 2006:30])、パリーナコチャス、カンガリョ・イ・アンドワイラス (Cangallo y Andahuaylas) の 3 地方が加わった。この 8 地方は固定化され、18 世紀まで変わらずに維持された。17 世紀初頭以降になると、ワマンガのエンコメンデーロ勢力は弱まっていくが、16 世紀段階においては彼らの力は絶大であった [Salas de Coloma 1998:36,41,44]。

³⁵ ワマンガの先住民語としてはケチュア、アイマラの両言語が使われていた [Millones 2007:50]。

³⁶ パリーナコチャスでは、1568 年にサン・クリストバル・デ・パウサ修道院 (Convento de San Cristóbal de Pauza) が建設され、ドミニコ会もまた先住民の布教にあたっていた [Pérez 1991:226-227; 網野 1995:150]。

カベリカ水銀鉱山、ルカナスの鉱山であるチュンビーリャ銀鉱山やグアリャリパ金鉱山 (la mina de oro de Guallaripa) で働かされはじめたときから、彼らの生存環境は一気に悪化しはじめた³⁷ [Stern 1982a:37,47; Santa María, 2017:64,164]。すなわち、ミタと称された鉱山での強制労働が原因だったのである³⁸ [Melgar y Carrasco 2007:56-57; Millones 2007:27]。とくにルカナスやソラスの人々は地元の鉱山はもとより、ワマンガからはるか南方アルトペルーに位置するポトシ銀山におけるミタ労働を強いられもしたという [真鍋 1995:16]。

ワマンガのこれらの鉱山の中で先住民労働者の労働環境がとくに劣悪だったのが、1563 年 11 月に発見され 1564 年から本格的に開発がはじまったワンカベリカ水銀鉱山であった [Bargalló 1969:164; Robins 2017:60-61]。銀や金など貴金属の精錬に必要な水銀を生産するために、ワンカベリカ鉱山で働く労働者はとくに危険な状態におかれた。この時期における水銀の主な供給先は、現在のメキシコにほぼ相当するヌエバ・エスパーニャ (Nueva España) の銀鉱山であった。

ポトシ銀山への水銀供給が始まるのは 1572 年のことである [Bargalló 1969:165] が、意外なことに、アトゥンスーリャ銀鉱山では水銀による銀の精錬がすでに行われていたという指摘がサンタ・マリアによって行われている。その理由は、1557 年にエンリケ・ガルセス (Enrique Garcés) によってアトゥンスーリャ銀鉱山の近くに位置していたとされるパラス水銀鉱山 (las minas de mercurio en Paras³⁹) がすでに発見されており、そこからの水銀が 1560 年以降、アトゥンスーリャ鉱山の銀鉱石に適用されて銀の精錬が始まっていたというのである [Santa María 2016:151; Santa María 2017:63-65,73-75]⁴⁰。

当時は労働環境の保全とか労働者の人権が問題とされることはほとんどなかった。ワンカベリカ水銀鉱山はやがて「死の鉱山 (la mina de la muerte)」とか「先住民の墓場 (el sepulcro de indios)」といった悪評を招く。鉱山労働者の多くが水銀中毒症を煩い、ことごとく死亡したからである⁴¹。そしてこの鉱山のミ

³⁷ 16 世紀ペルーにおいてスペイン人によって発見された最初の金・銀鉱山は、1537 年にルカナスとパリナコチャスで発見された鉱山であるとサンタ・マリアは述べている [Santa María 2017:64]。

³⁸ 貢納とミタは連動していた。先住民が鉱山ミタあるいは鉱山労働に従わざるをえなかった動機の一つは貢納を稼ぐ必要があったことである [Eguren 2005:44]。

³⁹ 筆者にはパラス水銀鉱山の所在地とかその実態を把握できていない [Santa María 2016:84,88,142; Santa María 2017: aparición en muchas páginas]。

⁴⁰ ワマンガにおける水銀鉱床の一部は先スペイン期から採掘されていた。辰砂を得るためであった。辰砂は、戦士の身体に塗られたり、またインカ王妃をはじめとする高貴な女性のための顔料・化粧品 (pigmento de cinabrio [bermellón]) として、また性病の治療薬として使用されたようである。植民地時代になるとポルトガル人エンリケ・ガルセスは、リマにおいて朱 (赤色顔料) を売る女性たちを早くから目撃していた。その朱とは、辰砂から取り出されたものでリンピ (llimpi) と呼ばれた。それはワマンガのトマク (Tomac)、グアコヤ (Guacoya) から運ばれてきたものであることを彼は察知した (彼は後にトマクに出向き水銀の精錬を果たした)。ガルセスはアルマデン (Almadén。スペインの有名な水銀鉱山) に行ったことがあり、水銀情報をもっていたからそれを理解できたのである。1550 年代末、ガルセスは第 3 代ペルー副王カニエーテ侯の命をうけて 1558 年にヌエバ・エスパーニャを訪問し、そこで水銀アマルガム法を数か月間学んだといわれている [Robins 2011:21-24]。ワマンガにおいてガルセスはパラス産の水銀を使って [1560 年から 1562 年にかけて、ペドロ・デ・コントレラス (Pedro de Contreras) と共に] 既に銀の精錬に成功していた、とサンタ・マリアは述べている [Santa María 2016:145-148,151-152]。

⁴¹ ワンカベリカ水銀鉱山における労働者の日常的な死は鉱山の発見直後から起きた。だがペルー植民地社会においてそれが問題視されるようになったのは、1600 年 5 月以降のことであった。当時の副王ルイス・デ・ベラスコ (Luis de Velasco, Marqués de Salinas, IX Virrey. 在位 1596-1604) のスペイン国王宛書簡によってである。ワンカベリカが病気と死の場所であること、それはゆゆしい良心の問題であり政治的な問題であるとベラスコは告発した [Sala Catala 1987:193-194]。ワンカベリカの先住民保護官ダミアン・デ・ヘリア (Damián de Jeria, Protector de los Naturales de Huancavelica) は、「そもそも先住民がいなければ、水銀も銀もそしてペルーも存在しなかっただろう」(“pues sin ellos ni habrá azogue ni plata...ni Perú.”) と述べた (1604 年 1 月 10 日付け) [Robins 2017:36]。また彼は同年 3 月 1 日に報告書を提出し、「副王 (ルイス・デ・ベラスコ) が、鉱山業者との契約を更新する前にそれに耳を傾けてくれるよう……細心の注意を払うよう」期待した。ダミアン・デ・ヘリアはワンカベリカの病気をはじめて描写した人となった。「…水銀の病…鉱石は坑内で働く先住民に咳や激しい病気をもたらす疑いがある。それはワンカベリカの病気 (enfermedad de Guancabélica/Huancabélica) と呼ばれるものである」と彼は指摘した [Sala Catala 1987:195]。ワンカベリカ水銀鉱山におけるミタや先住民労働者の労働の実態については、真鍋 [2006:32-43] や Lohmann Villena [1999:97-105] を参照。水銀中毒の蔓延によって人的資源が著しく枯渇し、ミタ労働者を提供していた先住民村の中には廃村となるケースも出てきた。さらに、先住民以外にも被害者は出ていた。例えば、水銀のバイオニアであった先述のエンリケ・ガルセ

タの徴集対象地域が、まさにワマンガの全地域であったことに注目したい。すなわち、アンガラエス、ワ
ンタ、チョコルボス（カストロビレイナ）、ビルカスワマン、ルカナス、アンダワイラス、パリナコチャ
スから先住民が強制的に徴集されていた〔真鍋 2006:22-23,30-31; 真鍋 2010:104; Golte 1980:76〕⁴²。タキ・
オンコイによってスペイン人の支配が滞るとともに、特にビルカスワマン、パリナコチャス、ソラスにお
いては先住民による武装蜂起への動きすらあったともいわれている〔Millones 2007:50〕。

タキ・オンコイに加わった先住民は労働意欲をなくし現実世界から離脱していった。先住民のサボター
ジュ（労働の忌避）を生み出したことで、社会的混乱が深まった。このことは事業主（エンコメンデーロ）
にとって死活問題となった。

1560年代後半期のワマンガの場合、スペイン植民支配体制はまだ緒に就いたばかりであった。事業主側
からみると植民地支配体制の縛りはまだ弱く社会は混沌の極みにあった。

V タキ・オンコイの鎮圧: 10 分の 1 税の確保と強制的改宗の推進

本章では、タキ・オンコイの鎮圧すなわち土着宗教の取り締まり・強制的改宗についてみていく。それは
教会巡察使アルボルノスの先導によって着手される。ワマンガ市参事会が直面した事態とアルボルノスと
の関係性を考察する。次に聖俗両権力による強制的改宗の推進についてみていく。

V-1 ワマンガ市参事会が直面した事態とアルボルノス

先述したように、アルボルノスがワマンガに派遣された理由は、同地域のエンコメンデーロに 10 分の
1 税を支払わせるよう図るためであった。しかし現地入りしたアルボルノスがそこで察知したものは、深
刻な事態を迎えていたタキ・オンコイであった。エンコメンデーロに 10 分の 1 税を支払わせるどころで
はなかった。それよりも、タキ・オンコイの鎮圧すなわち土着宗教の取り締まり・強制的改宗の推進が先
決問題であった。そこで本来の目的は置き去りにされてしまう。その証拠に、聖堂参事会員エステバン・
ビリャロン（Esteban Villalón）の証言によれば、1570 年 11 月時点で、ワマンガのエンコメンデーロが 10
分の 1 税を支払うことの合意にはまだ至っていなかった。10 分の 1 税の徴収は二次的な問題に変わって
しまった感がある〔Pérez 1991:232〕。こうした背景にはいったい何があったのだろうか。

巡察の期間、アルボルノスは市参事会の協力と支援を得ていた。市参事会員の大半が鉱山業の担い手でも
あるエンコメンデーロであり、市参事会は鉱山業の担い手の利益を代弁したからである。1560 年代の
後半、ワマンガでは小規模な金・銀鉱山のほか、とりわけワンカベリカ水銀鉱山の開発がすでにはじまっ
ていたが、鉱山業者は、先住民労働力が急激に不足するという事態に陥った〔Pérez 1991:227; Alborno
z 1990[1584]:278; Henson 2002:49; Cook 1999:346〕。その主因は、タキ・オンコイに参加した先住民のサボ
タージュによるものであった。

タキ・オンコイに参加した先住民には典型的な水銀中毒症の症状が現れていたとサンタ・マリアは述
べる⁴³。だとすれば、労働意欲が減退して当然である。

1560 年代末、市参事会員の間では危機意識が強まった。先住民の労働力が得られなくなる懸念が市参事
会のメンバーにとって最も重要な心配事になった。そうした中で、1569 年 9 月 12 日、ルカナス・アンダ
マルカス（Lucanas Andamarcas）の先住民の多くが鉱山で働くことを完全に拒絶した。すなわち先住民が
真っ向から鉱山ミタを拒否するという事態が起きたのである。市参事会はこの事態を放置すべきではない

スは水銀中毒に罹りそのせいで歯を失っていたという〔Santa María 2016:148,153-154,300,302〕。

⁴² タキ・オンコイが拡大した地域がワンカベリカ水銀鉱山のミタの影響を被った地域と一致するとの指摘は、ルイス・
ミリョネスらも行っている〔Millones 1990:16; Contreras 1982:94〕。

⁴³ 「身体の震え、神経過敏症、記憶喪失、自制喪失、怒りっぽさ、激高しやすさ、自信喪失、ひどい眠気・気だるさ、
意気消沈、歯肉炎、振顫譫妄（しんせんせんもう）つまり中毒による手足の震え・幻覚などを伴う症状、自殺志願、憂
鬱、気を滅入らせる精神病など……水銀中毒症に罹ると手当のしようがなかった……基本的に脳や腎臓、呼吸器官、
神経がやられた。消化器が麻痺し発汗が際だった。食欲不振、体重の低下が進行した」〔Santa María 2016:144-145〕。

との決定を下す。鉱山ミタを拒否する先住民の抵抗を打破すべしというのが、ワマンガ市在住のコレヒドール兼司直 (justicia mayor) アントニオ・デ・オスナヨ (Antonio de Hoznayo) と、先住民労働力を鉱山に配分する職責を担っていた判事のロドリゴ・トーレス・ナアロ (Rodrigo Torres Naharro) の方針であった。

1569 年 9 月 27 日に召集された市参事会では、タキ・オンコイの鎮圧に向けてアルボルノスへの協力が市参事会員に訴えられた。市参事会の 2 名の市長のうち、もうひとりの市長でありルカス・アンダマルカスのエンコメンデーロであったフアン・ベラスケス・ベラ・ヌーニェス (Juan Velázquez Vela Núñez) (地図 1: R) を代表者に出し、教会巡察使アルボルノスに協力して事態の打開をはかることにした [Pérez 1991:227; Albornoz 1990[1570]:59-60,93,163]。その日の集まりの記録には次のようにある。

本カビルドでは前述の人々が、インディオの間でわが聖なるキリスト教に対抗してたいへん迷惑で有害な多くのことが公然と見いだされるため、教会巡察使が、当市の規律や管轄権によってそれらに対して処置を講ずるよう言った。その仕事により、その原因を知り理解することが肝要である。有害な出来事が一掃され、流され、改められ、罰せられるようその原因を知り理解することが求められる。市長フアン・ベラスケス・ベラ・ヌーニェスがかの巡察使に同行して……巡察使にはあらゆる恩恵と援助を与える。前述の害悪が浄化され、改められ、神、イエス・キリストへの奉仕が情熱をもってなされるよう。またそのような被害の原因が根本的に理解されるように…⁴⁴

土着宗教の断絶に向けての施政としてカビルド (市参事会) は所管の先住民の断固たる統率と支配を決議した。この決議に際しては、アンガラエスのエンコメンデーロ・ワンカベリカ水銀鉱山の鉱山主・市参事会員であったアマドール・デ・カブレラ (地図 1: B2) を筆頭に、市長アントニオ・デ・オレーをはじめ、アンガラエス (地図 1: C) のエンコメンデーロであったディエゴ・ガビラン (Diego Gavilán)、ビルカスワマン (地図 1: F) のエンコメンデーロであったフアン・デ・マニエコ (Juan de Mañueco)、チョコルボス (地図 1: B1) のエンコメンデーロであったバルタサル・デ・オンティベロス (Baltasar de Hontiveros)、ビルカスワマン (地図 1: H) のエンコメンデーロであったフアン・パロミーノ (Juan Palomino)、ワンタ (地図 1: E) のエンコメンデーロであったクリストバル・ペーニャ (Cristóbal Peña) ら⁴⁵が証人として賛同の意を表明した。彼らは巡察使としてのアルボルノスの才能を褒め称え、当地における土着宗教の断絶とキリスト教化の推進に同意した。

そこには先住民の全面的な支配、換言するならば、強制労働の提供を拒む先住民を屈服させることへの強力な意思表示が伺われる [Pérez, 1991:228]。そこで今度はアルボルノスが証人として、上記のエンコメンデーロたちに自らの意思を表明したのであったが、それは驚きに値しない⁴⁶ [Albornoz 1990[1570]:59-

⁴⁴ ペルー国立図書館 (リマ市) が所蔵するワマンガ市のカビルドの記録簿 (Mss.A 603,f.24v)。この文書に関しては、Pérez [1991:227] が引用・掲載しているものを参照して訳出した。

⁴⁵ ここに示したカブレラ以下 7 名のエンコメンデーロについては、プエンテ・ブルンケの著書にも記載がある [Puente Brunke 1992:140-141,385-388,390-391]。

⁴⁶ 例えば、1570 年の『功績報告書』 [Albornoz 1990[1570]:67] に次のようにある。「前述のコレヒドールの前で、前述のクリストバル・デ・アルボルノスはバルタサル・デ・オンティベロスに対して証人として表明した。1570 年 3 月 1 日に前述のコレヒドールの前で、前述のクリストバル・デ・アルボルノスは証人として、ディエゴ・ガビラン、大尉クリストバル・ペーニャ、フアン・デ・マニエコやゴメス・セラノ、会計官ディエゴ・デ・サラサルとバルトロメー・ベロカルに表明した」「同年 3 月 2 日、前述のコレヒドールの前で、前述のクリストバル・デ・アルボルノスは証人として、フアン・パロミーノ、アマドール・デ・カブレラ、アントニオ・デ・オレー、ディエゴ・デ・ロマニー、ペドロ・デ・コントレラスに表明した」。アルボルノスは自身を第三人称で語っているほか、上記の文面中、「証人として表明した」には目的語が欠けているが、正確には「土着宗教の弾圧を表明した」となろう。それから上記の文が書かれたのは 1569 年 9 月ではなく翌 1570 年 3 月であることから推測して、アルボルノスはカビルドのメンバー (市参事会員) に対して一度ならず頻繁に土着宗教の弾圧を表明していたのであろう。なお、初出の人物であるゴメス・セラノ (Gómez Serrano)、ディエゴ・デ・サラサル (Diego de Salazar)、バルトロメー・ベロカル (Bartolomé Berrocal[公証人])、ディエゴ・デ・ロマニー (Diego de Romani) は、すべてワマンガ市在住者であった [Albornoz 1990[1570]:87,91,97,105,108]

69,74,78-79,81,83-84,93,101,111,158,163]。

こうして土着宗教断絶の推進に向けて市参事会当局ならびにエンコメンデーロ・鉱山業者がアルボルノスを支援することになったが、そうした俗人によるアルボルノス支援の動機は鉱山労働力の確保が狙いであったと判断してよいだろう。俗権（カビルド）と教権（アルボルノス）の利益が一致した土着宗教の断絶と改宗の推進は、1571年1月、副王トレドによって追認され、ワマンガにおける鉱山労働力確保の重要性が改めて鉱山業者、エンコメンデーロ、聖職者に知らしめられる契機となった〔Pérez 1991:228〕。

V-2 土着宗教弾圧の推進とタキ・オンコイの終息

アルボルノスは断固たる処置をとることになった。土着の祭祀・儀礼への参加者の処罰、土着信仰放棄の説得、偶像崇拜被疑者の隔離・再教育を命じた。偶像崇拝者や偶像の隠匿者には自白を強いたほか密告という方法もとった。偶像を発見するとその焼却や破壊を行った⁴⁷〔Albornos 1990[1570]:94,159; Pérez 1991:228-229〕。

アルボルノスの巡察が行われていた1569年の10月30日、フランシスコ・デ・トレドと異端審問官（inquisidor）がスペインからペルーに到着した。トレドは第5代ペルー副王に就任し、1570年のおよそ1年間にリマで過ごす。この時期における副王トレドの目立った政策としては、ペルーに異端審問所（El Tribunal de Santo Oficio）を開設したことである〔OCEANO 2000:546〕。トレドがワマンガを訪れたのは翌1571年1月のことである。1月22日には市参事会の建物に22名余りの要人を集合させ訓示（*alocución a los vecinos de Huamanga*）を行った。その22名のなかには、ワマンガのコレヒドールのアントニオ・デ・オスナヨ、アルカルデ（ワマンガ市長）のアントニオ・デ・オレー、エンコメンデーロのディエゴ・ガビラン、フアン・パロミーノ、フアン・ベラスケス・ベラ・ヌーニェス、そしてワンカベリカ水銀鉱山の主要な鉱山業者アマドル・デ・カブレラ、エンリケ・ガルセス、ペドロ・デ・コントレラスが含まれていた〔Toledo 1986[1569-1574]:101; 真鍋 2015a:52〕。そしてその結果、ワマンガ市において複数の勅令（*las Ordenanzas*）を發布した。そのうちの一つは、次の如く先住民に対して踊り（*taquis*）や酩酊（*borracheries*）を禁じるというものであった〔Pérez 1991:231〕。

インディオの酩酊や踊りは例外なく罰せられる。100回のむち打ちや当地からの10年間の流刑である...酩酊は健康や習慣面で害がある。それはまたキリスト教を阻む。彼らは古くからの祭祀や儀式を行ってきた。司直が酩酊の処罰に機を配るよう命じた.....酩酊が発覚したカシケはいかなる者でもまず、1年間の流刑...修道院や施療院での奉仕...第二に、3年間の流刑...第三に、カシケの地位を永久に剥奪し、この王国から追放する...酩酊が発覚したインディオには、市の通りや発覚場所での100回のむち打ちを食らわせる〔Toledo 1986[1569-1574]:110〕。

アルボルノスは1570年末に巡察の仕事をいったん打ち切りワマンガからクスコ市に戻った。クスコ市において彼は副王トレドに謁見し、『功績報告書』として纏められた巡察記録を副王に提出した〔Pérez 1991:228; 増田 1984:309〕。その後、副王トレドによってアルボルノスとクリストバル・デ・モリーナは再度巡察使に任命された。両者はワマンガの各現場に戻り、土着宗教の取り締まりを続行する。彼らは、偶像崇拝に関与した疑いのある先住民を犯罪人として追跡し捕らえた。その経緯は、アルボルノスの記録

⁴⁷ 処罰は、偶像崇拝儀礼への参加の程度に応じて変化した。「被告人」はまずいくつかのグループに分けられた。例えば、土着儀礼の説教師（*predicadores*）、儀礼に参加した先住民（*indios cómplices*）、偶像を隠したカシケ（*curacas encubridores*）、ワカの神官（*sacerdotes de huacas*）、呪術師（*hechiceros*）などである。処罰は、居住区からの追放（流刑）をはじめ多岐におよんだ。ワマンガ市の施療院（*el hospital*）や村の教会での労働奉仕、福音伝道用に特設された家に幽閉するケースもあった。「犯罪人」を示す衣服の着用、土着信仰の棄教宣誓、教会での労働強制、むち打ち、剃髪、罰金などの処置もとられた。タキ・オンコイの指導者や神官には厳罰が下された。偶像を隠匿したカシケにたいする処罰はさまざまであり、教会建造物修築費用の分担（これは罰金刑にあたる）が課せられたりもした。関係者への見せしめとして処罰は公然となされた〔Pérez 1991:225-226; Albornos 1990[1584]:289〕。

[Albornoz 1990[1577]; Albornoz1990[1584]] に描かれている。そこには偶像崇拜の容疑者、罰せられた呪術師、破壊されたワカの名前とその数が記録されている。偶像崇拜の容疑者たちはカトリック教義の再教育を強いられた [Albornoz 1990[1584]:259-296] 。

1571、72 年以降、市参事会当局ならびにエンコメンデーロ・鉱山業者らの強力な対応や処置とも相まって、ワマンガにおけるタキ・オンコイは下火となった [MacCormack 1991:185; Melgar y Carrasco 2007:55; Espinoza Soriano 1973:143-152; Wachtel 1973:123] 。

水銀汚染や劣悪な労働環境に対する先住民の抵抗、サボタージュに対し、それを解決して従順な労働者をつくりだすことを目的のひとつとしつつ、タキ・オンコイの鎮圧に象徴される土着宗教の弾圧と強制的改宗政策が展開された。先に問題提起した「先住民の精神的征服」の意味とは、白人事業主の規律の下で、指定した労働に耐える「健全なる」先住民労働者の育成・確保にあったと判断できる。先住民に土着宗教を放棄させ、白人の支配に従順なキリスト教徒に彼らを変えることにあったと断言できる。

VI おわりに

スペイン人による征服後、ワマンガの先住民はスペイン人エンコメンデーロによって鉱山ミタ、とくに恐怖に満ちたワンカベリカ水銀鉱山における強制労働を強いられることになった。先住民はきわめて過酷な搾取・抑圧に晒される。ペルーにおいて事実上スペイン植民地支配が始まったのは第3代副王カニエーテ侯の統治期（1556~60 年）であるが、タキ・オンコイは、スペイン植民地支配が始まり、ワンカベリカ水銀鉱山の操業が開始されると同時に起きた（1564 年）。またビルカバンバにおいてネオ・インカによる抵抗運動が継続中の不安定な社会状況下で出現した。1564 年以降、タキ・オンコイが広がったワマンガのすべての地方が、ワンカベリカ水銀鉱山のミタに人員を提供していた地域にぴったりと一致したことはとくに注目に値する。

ワマンガの場合、10 分の 1 税不払い問題の解決をはかるにはまずもってタキ・オンコイの鎮圧がどうしても必要であった。先住民のサボタージュが続く限り、エンコメンデーロにとって 10 分の 1 税など払えはしない。それどころか彼らにとってタキ・オンコイは死活問題となった。水銀汚染や過酷な鉱山労働が原因となって先住民社会が疲弊し、そしてそれに対する先住民側の抵抗としてタキ・オンコイは生じたように思う。この社会的背景に加えて、もともと 10 分の 1 税不払い問題を解決したい教権（アルボルノス）と、先住民のサボタージュを解決したい事業者の集まりであるワマンガのカビルド（俗権）の利害が一致し、しかも土着宗教の徹底的な取り締まりをともなつてタキ・オンコイの鎮圧が進行したのであった。

タキ・オンコイは、ワマンガのエンコメンデーロ（事業主）、市参事会、王権官僚、聖職者に先住民労働力確保の重要性を改めて知らしめる契機になったように思われる。タキ・オンコイの鎮圧にむけた、関係者の対応や方針は副王トレドによるペルー植民地改革に収斂されていく。タキ・オンコイを契機に王権は先住民の支配を強力に押し進めていく。カトリック教会直属の教会組織による教権体制とコレヒミエントによる俗権体制の構築・整備を急ぐのであった。

【謝辞】

本稿は、真鍋 [2015] を基礎とする。これをベースに、2019 年 7 月に開催されたアンデス・アマゾン学会第 8 回研究大会における口頭発表内容に加筆・修正したものである。最初にタキ・オンコイ研究を勧められ、貴重な資料を提供して下さった加藤隆浩先生、伊勢市で開催された国際学会において貴重なご指摘をいただいたルイス・ミリョネス教授、欧文による発表の機会を提供して下さった南山大学ラテンアメリカ研究センター、そのさいの査読者の先生、2019 年の口頭発表に対してコメントをいただいた皆さま、今回の執筆において有意義なコメントをくださった 2 名の査読者の方と編集委員、そして学会運営委員会ならびに関係各位の皆さまに、記して感謝申し上げます。ありがとうございました。また大変残念なことに、本年 4 月、ルイス・アルベルト・サンタ・マリア・フアレス博士ご逝去の報が届きました。博士のご

論考からは多くを学ばせていただきました。ありがとうございました。安らかな旅立ちになりますよう、心からお祈り申し上げます。

参考文献

Albornoz, Cristóbal de

- 1990[1569; 1570; 1577; 1584] “Información de servicios (Cuzco, 1569)” :43-58; “Información de servicios (Huamanga, 1570)” :59-165; “Información de servicios (Cuzco, 1577)” :167-253; “Anexo de la información de servicios” (1584) Relación de la visita de extirpación de idolatrías”:255-308. en *El retorno de las huacas: estudios y documentos sobre el Taki Onqoy, siglo XVI*. Luis Millones comp., Instituto de Estudios Peruanos-Sociedad Peruana de Psicoanálisis, Lima.

網野徹哉

- 1995 「植民地体制とインディオ社会：アンデス植民地社会の一断面」『講座/世界史 2 近代世界への道：変容と摩擦』（歴史学研究会編）、pp.127-157、東京大学出版会。

Arriaga, Pablo José de

- 1968[1621] “Extirpación de la idolatría del Pirú”. en *Biblioteca de Autores Españoles, tomo CCIX, Crónicas Peruanas de Interés Indígena*, pp.191-277, Ediciones Atlas, Madrid. (アリアーガ、パブロ・ホセ・デ「ピルーにおける偶像崇拜の根絶」(ペドロ・ピサロ他『ペルー王国史』増田義郎、旦敬介[訳・注]、大航海時代叢書、第Ⅱ期第16巻、pp.363-606、岩波書店、1984)。

Bargalló, Modesto

- 1969 *La amalgamación de los minerales de plata en Hispanoamérica colonial*. Compañía Fundidora de Fierro y Acero de Monterrey, México.

Contreras, Carlos

- 1982 *La ciudad de mercurio: Huancavelica, 1570-1700*. Instituto de Estudios Peruanos, Lima.

Cook, Noble Dabid

- 1999 “El impacto de las enfermedades en el mundo andino del siglo XVI”. *Histórica*, Vol.XXIII, No.2, diciembre, pp.341-365.

Eguren, Mariana, Carolina de Belaunde y Ana Luisa Burga (coms.)

- 2005 *Huancavelica cuenta: temas de historia huancavelicana contados por sus protagonistas*. Instituto de Estudios Peruanos, Lima.

Espinoza Soriano, Waldemar

- 1973 “Un movimiento religioso de libertad y salvación nativista. Yanahuara-1596”. en *Ideología mesiánica del mundo andino*, antología de Juan M. Ossio A., pp.143-152, Edición de Ignacio Prado Pastor, Lima.

Gabai, Rafael Varón

- 1990 “El Taki Onqoy: las raíces andinas de un fenómeno colonial”. en *El retorno de las huacas estudios y documentos sobre el Taki Onqoy siglo XVI*. Luis Millones comp., Instituto de Estudios Peruanos y Sociedad Peruana de Psicoanálisis, Lima, pp.331-405.

García, Enrique Fernández, SJ

- 2000 *Perú cristiano primitiva evangelización de Iberoamérica y Filipinas, 1492-1600, e historia de la iglesia en el Perú, 1532-1900*. Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial, Lima.

Golte, Jürgen

- 1980 *Repartos y rebeliones Túpac Amaru y las contradicciones de la economía colonial*. Instituto de Estudios Peruanos (IEP), Lima.

原田正純

- 1985 『水俣病は終わっていない』岩波書店。

2002 『金と水銀：私の水俣学ノート』 講談社。

Henson, Sandra Lee Allen

2002 “Dead Bones Dancing: The Taki Onqoy, Archaism, and Crisis in Sixteenth Century Peru”. Ph.D. dissertation of East Tennessee State University, Johnson City.

熊本学園大学水俣学研究センター、熊本日日新聞社編著

2012 『原田正純追悼集 この道を：水俣から』（原田正純の記事所収）熊本日日新聞社。

Lexus Editores

2007 *Historia del Perú*. LEXUS, Barcelona.

Lohmann Villena, Guillermo

1999 *Las minas de Huancavelica en los siglos XVI y XVII*. Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.

MacCormack, Sabine

1991 *Religion in the Andes; Vision and Imagination in Early Colonial Peru*. Princeton University Press, Princeton.

真鍋周三

1995 『トウパック・アマルの反乱に関する研究：その社会経済史的背景の考察』 神戸商科大学研究叢書 LI、神戸商科大学経済研究所。 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3123766>

2004 「16 世紀ペルーにおけるスペイン植民地支配体制の成立をめぐる」『人文論集』第 39 巻、第 3・4 号、pp.297-347、神戸商科大学学術研究会。

2006 「植民地時代ペルーにおけるワンカベリカ水銀鉱山と水銀汚染問題：植民地時代前半期」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』No.6、pp.19-55、京都外国語大学。 https://www.kufs.ac.jp/ielak/pdf/kiyou06_02.pdf

2010 「18 世紀ペルーにおけるフアン・サントス・アタワルパの反乱の社会経済的背景」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』No.10、pp.85-125、京都外国語大学。 https://www.kufs.ac.jp/ielak/pdf/kiyou10_05.pdf

2015 「16 世紀ペルーにおけるタキ・オンコイの政治・社会的背景をめぐる試論」『ラテンアメリカ・カリブ研究』第 22 号、pp.39-54。 <https://lacsweb.files.wordpress.com/2015/05/22manabe.pdf>

2019a 「植民地時代後半期ペルー・ワンカベリカ水銀鉱山の動向をめぐる：ブルボン改革との関係で」『人文論集』第 54 巻、pp.11-34、兵庫県立大学。 https://u-hyogo.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=5899&file_id=22&file_no=1

2019b 「16 世紀ペルーにおけるタキ・オンコイとワンカベリカ水銀鉱山」アンデス・アマゾン学会第 8 回研究大会発表要旨。 <https://sanams.web.fc2.com/dir02-congress/2019/8th-summary.html>

Manabe, Shuzo

2014 “Las minas de mercurio de Huancavelica y los problemas de polución de azogue durante la primera mitad de la época colonial del Perú”. Ponencia presentada en I Congreso Internacional de Peruanistas (Universidad de Nanzan, 4-6 de Julio de 2014). <https://sanams.web.fc2.com/dir02-congress/2014/3rd-summary.html>

2015 “El ensayo del trasfondo político y social del Taki Onqoy del Perú en el siglo XVI”. en *Perspectivas Latinoamericanas*, Edición Especial “El Taki Onqoy”, pp.92-110, Centro de Estudios Latinoamericanos, Universidad Nanzan, Nagoya, DOI: <https://doi.org/10.15119/00000770>. https://nanzan-u.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=800&file_id=22&file_no=1

増田義郎

1977 『インディオ文明の興亡』、世界の歴史 7、講談社。

1984 「解説」ペドロ・ピサロ他『ペルー王国史』（増田義郎、旦敬介訳・注）、大航海時代叢書、第 II 期第 16 巻、pp.641-669、岩波書店。

Matienzo, Juan de

1967[1567] *Gobierno del Perú*. Edition et Etude préliminaire par Guillermo Lohmann Villena, Instituto Francés

- de Estudios Andinos, Lima, París.
- Melgar Vásquez, Alejandro y Ranulfo Cavero Carrasco
2007 *El Taki Onqoy*. Ediciones Altazor, Lima.
- Mena, Valentín Trujillo
1981 *La legislación eclesiástica en el Virreinato del Perú durante el siglo XVI*. Editorial Lumen, Lima.
- Millones Santa Gadea, Luis
1973a “Nuevo aspectos del Taki Onqoy”. en *Ideología mesiánica del mundo andino* (antología de Juan M. Ossio A.), Edición de Ignacio Prado Pastor, Lima, pp.95-101.
1973b “Un movimiento nativista del siglo XVI: el Taki Onqoy”. en *Ideología mesiánica del mundo andino* (antología de Juan M. Ossio A.), Edición de Ignacio Prado Pastor, Lima, pp.83-94.
1990 “Introducción”. en *El retorno de las huacas. Estudios y Documentos del siglo XVI*. Luis Millones comp., pp.11-22, IEP-Sociedad Peruana de Psicoanálisis, Lima.
2007 *Taki Onqoy el largo camino del mesianismo andino*. Sarita Cartonera, Lima.
- Molina, Cristóbal
1959[1575] *Relación de las fábulas y ritos de los Incas*. Editorial Futuro, S.R.L., Buenos Aires.
- OCEANO
2000 *Enciclopedia del Perú*. OCEANO GRUPO Editorial, Barcelona.
- 大平秀一
2019 「ペルー・『ワロチリ文書』にみられる山の神々：色彩と明暗をめぐる感性・イメージ」『アンデス・アマゾン研究』 vol.3, pp.1-56, DOI: https://doi.org/10.50952/janams.3.0_1。 https://sanams.web.fc2.com/dir03-online-journal/201912/JAAS_vol3.pdf
- Pamo Reyna, Oscar G.
2017-2018 “Taki onqoy, ¿epidemia de intoxicación por exposición al mercurio?” *Acta Herediana*, vol.61, No.1, octubre 2017-marzo 2018, pp.46-54, DOI: <https://doi.org/10.20453/ah.v61i0.3294>. <https://revistas.upch.edu.pe/index.php/AH/article/view/3294/3332>
- Pérez, Pedro Guibovich
1991 “Cristóbal de Albómoz y el Taki Onqoy”. *Histórica*, Vol.XV, No.2 (diciembre), pp.205-236. <https://revistas.pucp.edu.pe/index.php/historica/article/view/7868/8145>
- Puente Brunke, José de la
1992 *Encomienda y encomenderos en el Perú, estudio social y político de una institución colonial*. Escma. Diputación Provincial de Sevilla, Sevilla.
- Ramos, Gabriela
1992 “Política eclesiástica y extirpación de la idolatría: discursos y silencios en torno al Taqui Onqoy”. *Revista Andina*, año 10, no.1, julio, pp.147-169. <https://revista.cbc.org.pe/index.php/revista-andina/article/view/405/383>
- Robins, Nicolas A.
2011 *Mercury, Mining, and Empire The Human and Ecological Cost of Colonial Silver Mining in the Andes*. Indiana University Press, Bloomington and Indianapolis.
2017 *Santa Barbara's Legacy: An Environmental History of Huancavelica, Peru*. Brill, Leiden/ Boston.
- Rojas Punciman, Jorge Luis
2015 “Percepciones sobre una misteriosa alianza: el Taqui Onqoy y los Incas de Vilcabamba”. en *Perspectivas Latinoamericanas (Edición Especial “El Taki Onqoy”)* (Centro de Estudios Latinoamericanos, Universidad Nanzan, Nagoya, Japón), pp.77-91, DOI: <https://doi.org/10.15119/00000769>. https://nanzan-u.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=799&file_id=22&file_no=1

Sala Catala, José

- 1987 “Vida y muerte en la mina de Huancavelica durante la primera mitad del siglo XVII”. *Asclepio Revista de Historia de la medicina y de la ciencia*, vol.XXXIX, fascículo 1, pp.193-204, Centro de Estudios Históricos, Consejo Superior de Investigaciones Científicas, Madrid. https://digital.csic.es/bitstream/10261/26223/1/SAD_DIG_IH_Sala_Asclepio39%281%29.pdf

Salas de Coloma, Miriam

- 1998 *Estructura colonial del poder español en el Perú: Huamanga (Ayacucho) a través de sus obrajés, siglos XVI-XVIII* (Tomo I). Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial, Lima.

Santa María Juárez, Luis Alberto

- 2016 “Taki Onqoy: epidemia de intoxicación por exposición al mercurio en el Perú del siglo XVI”. Tesis para optar el grado académico de doctor en salud pública, Universidad Nacional Federico Villarreal, Escuela Universitaria de Post Grado, Lima.
- 2017a “Mercurio y Taki onqoy en el Perú del siglo XVI”. Tesis para optar el grado de maestro en antropología, Pontificia Universidad Católica del Perú (PUCP), Lima.
- 2017b “Taki onqoy: epidemia de intoxicación por exposición al mercurio en Huamanga del siglo XVI”. *Revista Peruana de Medicina Experimental y Salud Pública*, vol.34, n.2, pp.337-342, DOI: <https://doi.org/10.17843/rpmesp.2017.342.2738>. <https://rpmesp.ins.gob.pe/index.php/rpmesp/article/view/2738/2748>

Stern, Steve J.

- 1982a *Peru's Indian Peoples and the Challenge of Spanish Conquest: Huamanga to 1640*. The University of Wisconsin Press, Madison.
- 1982b “El Taki Onqoy y la sociedad andina (Huamanga, siglo XVI)”. *Allpanchis*, XVI, no.19, pp.49-77, DOI: <https://doi.org/10.36901/allpanchis.v14i19.862>. <https://revistas.ucsp.edu.pe/index.php/Allpanchis/article/view/862/586>

Tito Cusi Yupanqui, Inca Diego de Castro

- 1916[1570] *Relación de la conquista del Perú y hechos del Inca Manco II*. CLDRHP, 1ª serie, tomo 2, Lima. (ティトゥ・クシ・ユパンギ [述] 『インカの反乱 被征服者の声』 染田秀藤訳、岩波書店、1987)

Toledo, Francisco de

- 1986[1569-1574] *Disposiciones gubernativas para el virreinato del Perú 1575-1580* (Tomo I), introducción de Lohmann Villena, Guillermo, transcripción de María Justina Sarabia Viejo, Escuela de Estudios Hispano-Americanos de Sevilla, Sevilla.

Wachtel, Nathan

- 1971 *La vision des vaincus. Les Indiens du Pérou devant la conquête espagnole 1530-1570*. Editions Gallimard, Paris. (ワシュテル、ナタン『敗者の想像力：インディオのみた新世界征服』小池佑二訳、岩波書店、1984)
- 1973 “Rebeliones y milenarismo”. en *Ideología mesiánica del mundo andino* (antología de Juan M. Ossio A.), pp.103-142, Edición de Ignacio Prado Pastor, Lima.

Worsley, Peter

- 1968[1957] *The Trumpet Shall Sound: A Study of 'Cargo' Cults in Melanesia*. Granada Publishing Ltd, London. (ワースレイ、ピーター『千年王国と未開社会 メラネシアのカーゴ・カルト運動』吉田正紀訳、紀伊國屋書店、1981)

採択決定日：2021年10月 6日

掲載日：2021年12月 19日

Taki Onqoy y la contaminación por mercurio en el Perú del siglo XVI: el problema de la recaudación de diezmo, el sabotaje de indígenas y la evangelización forzada

Shuzo MANABE

UNIVERSIDAD DE HYOGO

palabras claves : Taki Onqoy, región de Huamanga, minas de mercurio de Huancavelica y
contaminación por mercurio, diezmo y Albornoz, evangelización forzada

En la década de 1560, surge un movimiento de acción idolátrica llamada “Taki Onqoy”, en la región de Huamanga, altiplanicie de los Andes peruanos. “Taki Onqoy” en lengua quechua quiere decir “enfermedad del baile”. Este movimiento paralizó la vida cotidiana de los indígenas. Hasta ahora, se lo ha considerado como un movimiento de resistencia religiosa por los indígenas peruanos que negaban el dominio de España y el cristianismo, y esperaban la resurrección de las huacas (las sagradas para indígenas), es decir, los dioses autóctonos particulares de los Andes y la llegada del nuevo mundo. Se dice que éste, se extendió desde el Repartimiento de Parinacochas del sudeste de Huamanga del Obispado de Cuzco (desde agosto o septiembre de 1564) hasta algunos años después. Se acusaron a unos 8000 indígenas de participar en este movimiento, y se los forzaron a convertir al cristianismo colectivamente. Poco después, Taki Onqoy, se extendía a casi todas las regiones de Huamanga.

Entre los últimos estudios sobre Taki Onqoy, en el año 2014, presenté oralmente en español “Las minas de mercurio de Huancavelica y los problemas de polución de azogue durante la primera mitad de la época colonial del Perú.”, en el 1^{er} Congreso Internacional de Peruanistas (Universidad de Nanzan, 4-6 de Julio de 2014). En el año 2015, escribí y publiqué en español “El ensayo del trasfondo político y social del Taki Onqoy del Perú en el siglo XVI.”, en *Perspectivas Latinoamericanas (Edición Especial “El Taki Onqoy”)*, Centro de Estudios Latinoamericanos, Universidad Nanzan, Japón, pp.92-110. ([Manabe, 2015b]) .

En el año 2016, Luis Alberto Santa María Juárez, médico y antropólogo peruano, escribió su tesis doctoral: “Taki Onqoy: epidemia de intoxicación por exposición al mercurio en el Perú del siglo XVI”, con referencia a Taki Onqoy y la epidemia de intoxicación por exposición al mercurio desde el punto de vista de la salud pública, y la presentó en la Universidad Nacional Federico Villarreal del Perú. Y en el año 2017, Santa María escribió su tesina de master en antropología: “Mercurio y Taki Onqoy en el Perú del siglo XVI” y la presentó en la Pontificia Universidad Católica del Perú.

En ambos estudios, Santa María indicó que Taki Onqoy había ocurrido a causa de la epidemia de intoxicación por exposición al mercurio, citando e incluyendo una descripción de [Manabe, 2015b] en [Santa María, 2016: 28-32; Santa María, 2017: 26]. Esto confirma que el trabajo del suscrito, Shuzo Manabe, ha contribuido e influido en ambas tesis de Santa María.

En el presente estudio, pruebo una nueva interpretación desde el punto de vista de la historia para aclarar un aspecto de la relación entre Taki Onqoy y la contaminación por mercurio. El mercurio procedente de las minas de Huamanga, especialmente de las minas de mercurio de Huancavelica. Intento seguir el problema de la recaudación del diezmo, para responder a la interrogante ¿cómo este problema se relacionaba con la represión de Taki Onqoy? Y, desde el punto de vista de la historia, observo ambos asuntos, el tema de Taki Onqoy y el problema de la contaminación por mercurio respectivamente, y examino y estudio el siguiente cuestionamiento ¿cómo se entrecruzaban ambos asuntos, etc.?